第29号
発行日：R 2.8.21

純正会　地域包括ケア通信

発行：純正会地域包括ケア推進委員会事務局

順調に委員会は定期開催をしています！

ご挨拶

皆さんお元気に過ごされていますか？新型コロナウィルスは感染拡大し、医療の現場は皆、戦々恐々の毎日です。

そして季節は夏。今年の夏は特に暑く、コロナと夏の暑さに負けないように委員会のメンバーは皆毎日元気で頑張っています。

純正会地域包括ケア推進委員会の沿革

今回の委員会では、これまでの委員会活動を振り返り、改めて委員会の活動の主旨を参加者全員で確認する良い機会となりました。委員会のメンバー以外にも東洋病院の野田事務長さんが参加されました。

発表者は、居宅介護支援事業所太陽の安藤さんです。

平成29年12月に発足したこの委員会は、毎月の勉強会や事例検討会をはじめ中川区や港区で計3回の地域交流会を開催してきました。パワーポイントで委員会が誕生した経緯や少しずつ大きくなっていく経過、地域活動の様子を写真とともに紹介しました。

委員会活動の写真を皆で見ながら交流会の準備で大変だったことやたくさんの参加者が来ていただきうれしかったことなどその時の喜び、達成した興奮を思い出しながらこれからの委員会活動についてより強い意思を確認しあいました。今はコロナの影響で委員会は地域活動を自粛していますが、限定された今の環境でも何かやっていかなくては！と気合が入りました。

初めて参加された野田事務長さんも、「委員会の事は知ってはいたが、こんなにたくさんの活動をしていたんだ」と委員会活動に関心をもって頂き大変うれしく思いました。

委員会の主な活動拠点は東洋病院の地下会議室です。東洋病院にはいつもご協力いただいていますので、野田事務長さんに委員会の主旨や活動内容を知っていただけることは大変有意義なことでした。

これからも委員会に課せられた役割を果たせるよう『いま私たちにできること』を考え行動していきたいと思います。

「家で死にたい」を叶えられなかった事例

今回の事例提供者は訪問看護ステーション太陽の横井さんです。

Aさん（80歳代男性）はギャンブルが原因で離婚しC県（他県）で生活していましたが肺がんと診断され、頼るところがなく元妻のBさんの家に転がりこんできました。

Bさんは面倒見の良い姉御肌の気質でAさんを自分の家で介護することになりました。

Aさんは肺がんが直腸に転移したためD病院に入院し人工肛門を造設しました。退院後はBさん宅からD病院に通院しながら生活を送ることになりました。それに伴い訪問看護、ケアマネ、訪問介護、訪問入浴、ベッド、車いすの貸与が関わることになりました。

Aさんは、どんな事があっても最期はこの家で亡くなりたいと願っていましたが、介護者であるBさんの気持ちは、「Aさんの希望を叶えたい気持ちがあっても自分が看られるかどうか」不安に感じていました。

在宅チームでは、Aさんの願いを叶えるためにBさんの不安感を取り除けるよう支援を行いました。そのかいもありBさんもAさんを家で看ていく気持ちに傾いていましたが、少しずつ弱っていくAさんを診て、主治医はBさんに「これから大変になるのでBさんがAさんを看るのはBさんにとって大変だと思うから入院させて病院で最期を迎えてはどうか」と提案をされました。Bさんはその方がいいと思い直し入院させてほしいと言いました。

Aさんは「家で死にたい」と強く望んでいたので、Bさんと看取りのついての話をしたり主治医へも情報提供をしたりしましたが、Bさんも主治医も入院した方が良いと判断され、Aさんの願いを叶えることができないままAさんは入院しすぐに病院で亡くなってしまいました。

横井さんは、このケースをふり返りなにかできる事はなかったか、皆の意見を求めました。

【一問一答】

Q：Aさんの性格は？

A：気が小さい性格、奥様に強くものが言えない。

Q：本人の職歴について？

A：他県では寿司屋をやっていた。

Q：AさんとBさんに子どもはいないのか？

A：一人息子さんがいるが、他県で遠いため関わりが弱い。

Q：主治医とはどのように話をしたか？

A：訪問看護師が受診に同席し、本人の想いや往診医の提案を行ったが難しかった。

Q：相談に入ってくれる、退院調整看護師かA：退院調整看護師が関わっていたが、経験が浅いのかあまり間に入ってくれなかった。

Q：Aさんは自宅で生活できたと思うか？

A：往診や在宅サービスを利用すれば在宅で看取りができたと思うし、不安を抱えるBさんの支援も十分できたと思う。

参加者も、在宅での生活は可能だと思われるという意見が多くでましたが、やはり決定権がある主治医を説得できないと厳しいとの意見がでました。

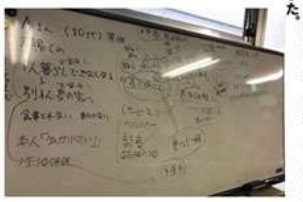
参加されているMSWの方からは、自分の病院のケースだったら間に入れるケースだと思う、との意見は、純正会のMSWの質の高さが伺えました。

事例をだした横井さんより、

「家で死にたい」と希望している療養者と家族を支えるために一生懸命かかわったが主治医の考えを変えることはできなかったことが残念で悔いが残った。もう少し何かできなかったのか、Bさんの不安を拭い切れず病院のほうが安心と思わせてしまった訪問看護の力の無さを痛感した。病院の医師には在宅の可能性を知ってほしいと思うし、MSWや退院調整看護師たちの力で在宅チームと病院との隔たりを少しでも無くしてもらいたい。

訪問看護としての課題がたくさん残った貴重な事例。皆さんの意見をもとに今後も自身の糧として次の事例に活かしたい。との前向きな感想をいただきました。

改めて、「本人が家で最期を迎えたい」を叶えるためには、本人や介護者の想いだけでなくとりまく周辺の支援者が目標を一つにして対応しなくてはいけない、まさに地域包括ケアの推進が改めて急務である事がわかる事例でした。



次回の予定

日付	行事	場所
8月21日　13時半	小牧第一病院　MSW　講神さんの講義	東洋病院